

旧金沢藩士、屯田兵子孫  
惣社・中村さん依頼文書  
生家「窪田家先祖由緒一類」

金沢市立玉川図書館文書

「先祖由緒一類附帳」(関係部分写し=明治3年2月)

金沢藩士のおよそ2/3にあたる1万1千余家を保管

旧金沢藩士窪田久馬2男で屯田兵となった駒太郎子孫(中村さん)が石川県立図書館に資料請求された。

- ①「先祖由緒一類附帳」 窪田久馬 窪田家先祖
- ②「先祖由緒一類附帳」 古坂保左衛門 実方先祖  
原文および解読
- ③玉川図書館平成24年度企画展「加賀藩と北越戦争」  
第14代藩主・慶寧 など関係資料

令和5年3月

八幡史学館

由緒一類

歴

後回之馬

三

一  
未申仰高  
貳拾俵

累三十

行

私法實去乘古後保壽才心院少庭園理此無養子及國人

病死為代文久之京十有割傷傷是後。也仰切米右之通不

慶應三年七月京切仰日沙日也 仰後同三月日同沙月同同三年月

製造所當書。仰後同三月沙日清法。成世節若誠書三而後也

大死方小頭代。仰後同三月

從三位振仰度洲治沙野清。後妙足並上法。仰後同三月時存沙日見方

上法所。專沙。仰後同三月時存沙日見方



此書乃七位撰... 此後...

相... 此後...

言... 此後...

此... 此後...

烈... 此後...

村... 此後...

名... 此後...

此... 此後...

同... 此後...

好... 此後...

別... 此後...

曾... 此後...

此... 此後...

此... 此後...

此... 此後...

此... 此後...

沙進習武家系事家山河河

嗣松浦公之所感於其子或子之若夫少少河津松發及松多古

方也派後河役也河津也勤多也凡同年三月沙江正身少取

初人可後右執事古方定役也勤多也凡河津正身是性若目

只後卒改也河津河治之年四月甲戌之臨御位也余亦勤多集

凡同室月之臨御位也勤多也凡河津正身是性若目

武等名古也河津河治正身也

一 古也一 祖父

遺口一

名古也河津河治正身也勤多也凡河津正身是性若目

言古也河津河治正身也勤多也凡河津正身是性若目

一 古也一 祖母

古也河津河治正身也勤多也凡河津正身是性若目

一 古也一 祖父

古也河津河治正身也勤多也凡河津正身是性若目

古也河津河治正身也勤多也凡河津正身是性若目

享保十年

古也河津河治正身也勤多也凡河津正身是性若目

古也河津河治正身也勤多也凡河津正身是性若目

一言祖母

宣曆七年病死

多寶殿瑞雲寺  
山口叔貴書

一曾祖父

產田伴

伴與身入伴也立誓為代立見保二年割陽所是時日也

沙切果武隆儀下少知多立此明和七年病死

一曾祖母

古右叔合

明和七年病死

一祖父

龍田公

伴右馬次入伴也病死為代明和七年病死

沙切果武隆儀下少知多立此明和七年病死

一祖母

高島叔合

嘉永二年病死

一父

產田理人

理人為安實之官願也所是惟竹林叔合也

產田伴右馬次子也故同人名病死為代文政十年割陽所是時

多寶殿瑞雲寺  
山口叔貴書

庚辰年八月廿九日卒

一母

卒 國如法平妹

一妻

日 妻如法平娘

一セウシ

私也 國如法平弟

一同言

卒 國如法平弟

一古古

卒 官如法平

一古古

日 國如法平

一古古

日 國如法平

一古古

士族 國如法平

國如法平

一祖父

古如法平

少程少凡享祿之命古如法平同命也 池原行女之孫也

一祖母

古如法平 古如法平

弘化二年商火信

一父

古坂名光斐

昌元為安官去古坂高壽高二官也其死弘化元年言由  
之書及言弘化元年其死之人其死於初年其死於延年

高死信也

一母

年  
言弘化元年高斐

一兄

同  
高保志若

一右

古坂保志若其同人之也其死弘化元年  
古坂保志若

一宗命去一向宗寺之全深廣國町能樂寺檀那也其信

右私由信一類物也其信弘化元年其信之親親信若

一切其信弘化元年其信增壽也其信高壽也其信高壽也

月以信來未月

信之信也

全深廣信

石室窪田之馬由緒一  
所少傳任之古書  
之序公同續增減也  
一帙編書之通方  
及由公

西古局  
印

深可  
野村



野村之  
印



法鏡一列

久

十六

古坂 傳高  
古坂 傳高

年中切本

一廿拾九傳

歲辛八

古坂傳高藤原博季

和漢實者高田之兵衛家兼古坂傳高也

山之廣江 力切 傳高田之兵衛家兼

之紀如永之年及病也 乃代名

穴人扶持給相勤了 乃 乃度每二年之人扶持如傳

辛卯年之兵清中... 之節數... 及... 重...

與人相勸... 屬... 人... 骨... 勸...

明... 九... 一... 一... 持... 勸...

弘... 屬... 同... 年... 七月... 率... 以... 指... 加... 同... 年... 十二月... 持... 持... 方...

儂... 數... 以... 引... 進... 仰... 切... 未... 右... 之... 通... 以... 以... 以... 今... 設... 由... 儲... 相... 改... 以...

一 曾祖父

古... 坡... 源... 光... 德...

源... 光... 德... 誠... 心... 涉... 故... 以... 而... 兵... 清... 家... 乘... 古... 光... 行... 以... 今... 持... 德...

相... 勸... 以... 以... 一... 自... 政... 軍... 年... 病... 死... 以... 以... 以... 年... 年... 年... 年...

世... 以... 以... 中... 儀... 傳... 美... 不... 王... 以...

金

一 曾祖母

德... 家... 光... 清... 德...

寬政七年病死

一祖父

古坂市兵衛

少部兵衛 正徳九年 正徳九年 正徳九年 正徳九年 正徳九年

父為家名 正徳九年 正徳九年 正徳九年 正徳九年 正徳九年

正徳九年 正徳九年 正徳九年 正徳九年 正徳九年

誠中 誠中 誠中 誠中 誠中

一祖母

故善兵衛娘

正徳九年 正徳九年 正徳九年 正徳九年 正徳九年

一父

古坂昌久

昌久 昌久 昌久 昌久 昌久

昌久 昌久 昌久 昌久 昌久

佐相勤弘在平高田之兵清言上亦受接

同人家奉祀家以人扶持佐相勤弘在平家

少年病

九列場所者

故以節其諸娘

金沢小立御中石川町老尾在

兵清養女

一冊

一妻

私事不在此

古坂得太郎

右同割

武人

年

宮窪田半松

右同人せり同人家奉祀

宮窪田之部

一せり

一娘

一牙

一右い

一宗方之一向宗寺之舎流免淨光寺檀那所存

右前續一類附也以此所出於外心以上之親類

緣者一切所存不向後也減有之者一者書附也

少數一二...

明治三年十二月

古坂保德

金澤藩廳

右古坂保德由緒一類附也此係德孝子相送  
書在古坂保德藏之書是也此書之通可於友  
堂也以上

南控自記辛丑年

右記在之



言者古坂保德  
之友也以上

市原市総社・中野美子様依頼文書

金沢市立図書館文書「先祖由緒ならびに「類附帳」(部分)

抱えられ、嘉永五年父病し(死)致し、代りとして名跡申し渡され、宛行(あてがい)

五人扶持給相勤めまかりあり候ところ、慶応二年一人扶持加増

(表紙)

由緒一類附帳

(2ページ)

申し付けられ、久兵衛他國詰めの節数度供仕り、重立(おもだち)家来

兩人にて相勤め候ところ、一人役申し付けられ、格別骨折り

相勤め候につき

明治元年二人扶持加増申し付けられ、都合八人扶持給相勤め

まかりあり候ところ、同三年七月卒へ指し加えられ、同年十二

月扶持方

儀数引直され、御切米右の通りこれ下され候につき、今般由緒相

改め申し候。

古坂 保喜と改める

十六

古坂保左衛門

(1ページ)

年中御切米高

歳三十八

一、二十九俵一斗一升

古坂保左衛門藤原博季

私儀、実は高田久兵衛家来古坂昌左衛門せがれござ

候のところ□□□□(虫くい)分切によりて高田久兵衛譜代家来

(3ページ)

一、曾祖父

古坂源五左衛門

(5ページ)

源五左衛門儀、山崎故次郎兵衛家来にて宛がい五人扶持給

越中砺波郡今石動(いまいするぎ)町人高岡屋

相勤めまかりあり候ところ、寛政四年病死仕り候、抱えられ候

一、祖母

故善兵衛娘

年号ならびに誰

弘化二年病死仕り候

せがれと申す儀、伝承仕らず候。

一、父

古坂昌左衛門

一、曾祖母

金沢「虫食い」町

昌左衛門儀、山崎故次郎兵衛家来古坂故五郎兵衛二男

綿谷左兵衛娘

ござ候ところ、坂井故四郎左衛門家来抱えられ宛がい五人扶持

(4ページ)

寛政七年病死仕り候。

(6ページ)

給相勤めまかりあり候ところ、天保九年高田久兵衛方へ所望よ

一、祖父

古坂五郎兵衛

り

五郎兵衛儀、古坂故源五左衛門せがれござ候ところ、享和三年

同人家来抱えられ宛がい五人扶持給、相勤めまかりあり候とこ

父家名をなし山崎故次郎兵衛家来抱えられ宛がい五人

る嘉永

扶持

五年病死仕り候。

給相勤めまかりあり候ところ、弘化元年病死仕り候。

元割り場付小者

一、母

故次郎兵衛娘

金沢小立野中石引町矢尾屋

の親類

一、妻

八兵衛養女

縁者一切ござなく候。向後増減これある節は書付をもって御断り申しあげべく候。以上

(7ページ)

明治三年十二月

古坂保左衛門(花押)

私手前まかりあり候

金沢藩庁

一、せがれ

古坂保太郎

右同断

(9ページ)

一、娘

二人

右古坂保左衛門由緒一類附吟味仕り候ところ相違

卒

ござなく候、向後増減これある節は脇書の通り

一、弟

窪田半左衛門

御届けに及びたるべく候。以上

右同人せがれ同人手前まかりあり候

南給両組卒廻達方(印)

一、おい

窪田久太郎

岩脇莊二(花押)

一、宗旨は一向宗、寺方金沢大衆免淨光寺檀那ござ候

高桑理平(花押)

岩脇八十次(花押)

(8ページ)

右私由緒一類附如斯(かくのごとく)ござ候、この外いところ以上

市原市総社・中野美子様依頼文書

金沢市立図書館文書「先祖由緒ならびに一類附帳」(部分)

(表紙)

由緒一類附帳

一、窪田久馬

(1ページ) 年中御切米高

年三十一

一、二十俵

窪田久馬「源五左衛門か」

私儀実は卒古坂保養弟にござ候ところ、窪田理左衛門養子に相成り、同人

病死代りとして文久二年十二月、割り場付足輕仰せ渡され、御切米右の通りこれを下され候。

慶応二年七月京都御内御用仰せ渡され、同十二月御内用御用済み、同三年七月

製造所留書仰せ渡され、同十二月御守衛詰めにまかり越し候節、名越松三郎殿手合い  
大砲打方小頭代仰せ渡され、同十二月

從三位様(前田慶寧)最後の金澤藩主(御座所御警衛として八坂

妙見堂へ出張仰せ渡され、同十二日晩七時御引取りにつき

出張所より直々御供仰せ渡され、御道中御供首尾よく相勤めまかり帰り候、同十二月撃剣

(2ページ)

稽古方世話役仰せ渡されまかりあり候ところ、明治元年堀又之助殿隊にて

欄松様(前田利同)慶寧幼弟、富山藩主(御加勢として越後路出張

仰せ渡され、同年四月二十二日金澤出立、閏四月二十一日

高田へ着、同所に二十二日まで滞留、中町廻方御用相勤め、同夜五時高田出陣、同二十五日

越後柿崎において、小頭加任仰せ渡され、年中料錢五十貫文これを下され、同二十七日九時鯨波戦争

烈しく相働き、同夜青海川退陣、同二十八日鯨波出陣、五月朔日柏崎へ繰り出し、同夜田

塚村へ出陣、同日同夜柏崎において堀丈之助殿、長州藩「虫くい」役と行き違いの儀出来にて割腹

につき、水野徳三郎殿へ付属仰せ渡され、同月六日妙法寺割町赤田洞九と戦争

相働き、同十四日炭衆一ノ坪別山の戦争相働き、同十八日出雲崎戦争相働き、

(3ページ)

同二十八日久田村、山田村田口などの戦争烈しく相働き、「虫くい」六月

朔日薬師峠繰り替え、同五日晩七時関原へ出陣、同日同所において股怪我つかまつり同六日

別山に退陣、同十二日出雲崎病院まかり越し、同七月(虫く

(イ)日怪我追々平癒につき出勤、同日各地へ引取り、同日同所に斥候、番兵および召捕人に勤番つかまつり候ところ、同日木村実之助殿隊と繰り替え仰せ渡され、都合六か度の戦争もつばら相働き、同月二十二日右地出立、八月三日帰陣つかまつり候。出陣中従三位様ならびに  
 頼松様よりも戦争中大儀に廻り召され候段、度々御沙汰こうむり、帰陣後、  
 御台所において御料理これを下され、御通達にて戦争中度々の  
 口戦大儀に廻り召され候段、

(4ページ)

御近習頭衆をもって御沙汰こうむり奉り、  
 頼松様よりも御感状ならびに金子二千六百疋これを下され、帰陣後撃剣稽古  
 方世話役帰役仰せ渡され、相勤めまかりあり候ところ、同年十二月御改正につき小頭  
 加入口られ、右稽古方定役相勤めまかりあり候ところ、明治二年足輕の名目  
 口られ、卒族仰せ渡され、明治三年四月第二大隊押伍命じられ相勤めまかりあり候  
 のところ、同閏十月大隊御指し止め相成り候につき押伍免ぜられ、同四年正月職掛り  
 二等留書仰せ渡され相勤めまかりあり申し候。  
 一、五世の祖父 窪田才右衛門

(5ページ)

才右衛門儀、奥村故伊予守殿家来従組相勤めまかりあり候ところ、召し抱えられ候年号、宛がい高ならびに病死年号および誰

せがれと申す儀伝承仕らず候。  
 一、五世の祖母 由緒ならびに病死年号伝承つかまつらざる候。  
 一、高祖父 窪田先伴丞  
 伴丞儀、奥村故伊予守殿家来従組窪田故才右衛門せがれござ候ところ、  
 享保十年  
 宝林院様付福島故善大夫殿組足輕欠人代わりとして召し抱えられ、御切米二十俵  
 これを下され相勤めまかりあり候ところ、宝曆五年病死つかまつり候。

(6ページ)

一、高祖母 多賀故右衛門殿家来 山口故覚兵衛娘  
 宝曆七年病死つかまつり候。  
 一、曾祖父 窪田伴丞  
 伴丞儀、父伴丞立ち替り代りとして寛保二年割り場付足輕召し抱えられ、  
 御切米二十俵下され相勤めまかりあり候ところ、文政九年病死つかまつり候。  
 一、曾祖母 今称故内記殿家来 土屋故金齋娘  
 明和七年病死つかまつり候。  
 一、祖父 窪田伴右衛門

(7ページ)

伴右衛門儀、父伴丞病死代りとして明和七年割り場付足輕召し抱えられ  
 御切米二十俵下され相勤めまかりあり候ところ、文政九年病死つかまつり候。  
 一、祖母 入江故治左衛門殿組足輕 高桑故善左衛門娘  
 嘉永二年病死つかまつり候。

一、父

窪田理左衛門  
 理左衛門儀、実は宮越町付足輕武林故吉大夫せがれにござ候ところ  
 窪田伴右衛門養子にまかりなり同人病死、代りとして文政十二年割り場付足輕召し抱えられ、御切米二十俵下され相勤めまかりあり候ところ、天保八年盗賊改め方

(8ページ)

定役仰せ渡され相勤めまかりあり候ところ、万延元年三月病死つかまつり候。  
 一、母 卒 岡本清五平妹  
 一、妻 同 宮地津兵衛  
 一、せがれ 私手前にまかりあり候 窪田仙太郎  
 一、同二男 右同断 窪田駒太郎  
 一、父方おじ 卒 宮地伊平  
 一、母方おじ 同 岡本清五平  
 一、母方おじ 同 清水寛兵衛

(9ページ)

一、母方おば 土族 吉村故武右衛門妻  
 一、母方いとこ 同 岡本文之助  
 一、祖父 実方 古坂五郎兵衛

五郎兵衛儀、山崎政次郎兵衛殿家来古坂故源五左衛門せがれにござ候ところ、享和三年父家名として御同人へ抱えられ宛がい五人扶持  
 給相勤めまかりあり候ところ、弘化三年病死つかまつり候。  
 一、祖母 今石動町人高岡屋故善兵衛娘

(10ページ)

弘化二年病死つかまつり候。  
 一、父 古坂昌左衛門  
 昌左衛門儀、実は古坂五郎兵衛二男にござ候ところ。弘化元年高田  
 久兵衛殿方へ抱えられ宛がい五人扶持給相勤めまかりあり候ところ、万延元年  
 病死つかまつり候。  
 一、母 卒 高松故次郎兵衛娘  
 一、兄 同 古坂保喜  
 一、おい 古坂保喜せがれ 同人手前にまかりあり候 古坂保太郎

(11ページ)

一、宗旨は一向宗、寺は金澤広岡町願乗寺旦那にござ候  
 右私由緒一類付かくのごとくござ候、この外いとこ以上の親類縁者  
 一切ござなく候、向後増減などこれあり候節、書付をもってお届け申上げ候。以上  
 明治四年未三月 窪田久馬(花押)  
 金澤藩庁

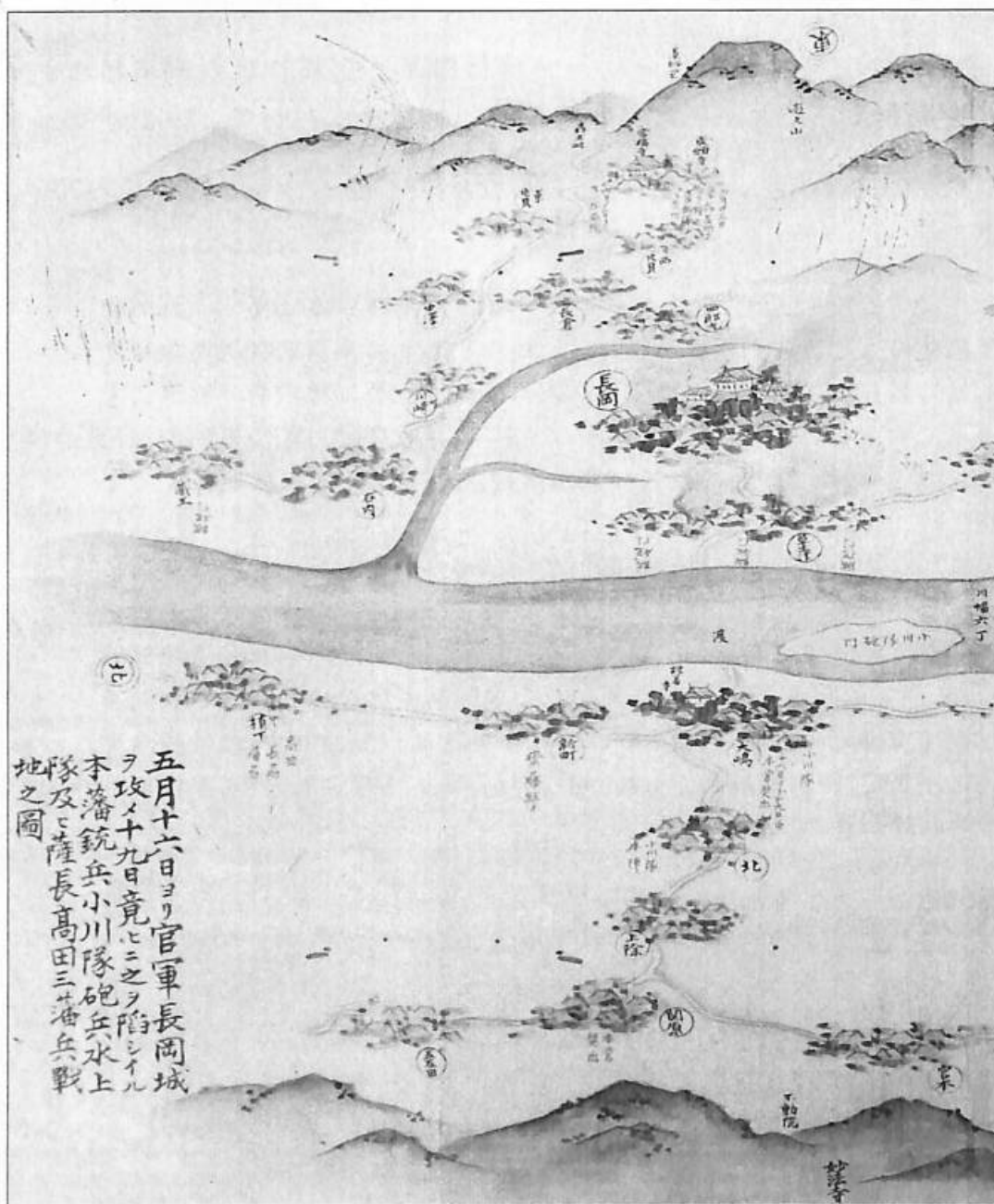
(12ページ)

右窪田久馬由緒一類附吟味つかまつり候ところ相違  
 ござなく候。向後増減これあり候は御脇書きのとおり御届に及びたるべく候。以上  
 西六番組廻達方(印)  
 深町鉄五郎(花押)  
 野村与一郎(花押)



平成24年度春季展

# 加賀藩と 北越戦争



「加賀藩北越軍事輯録」⑩ (16.51-95)

平成24年 4月17日(火) ~ 6月17日(日)

金沢市立玉川図書館 近世史料館









このページは、2019年3月に保存されたアーカイブです。最新の内容ではない場合がありますのでご注意ください

(2000年2月4日作成)

# 石川県と戦争(1) 戊辰戦争～日清戦争

興味のある項目へジャンプ! 1. 戊辰戦争(北越戦争) 2. 西南の役 3. 日清戦争

## 1. 戊辰戦争(北越戦争)

慶応4年(1868)正月3日、鳥羽・伏見の戦端が開かれた。単純な兵員から見た兵力では、徳川方が上回っていたが、火力の精度が上回っていたのか、徳川方の火薬庫に官軍方の砲弾があたり、大爆発するなど、徳川方は敗走した。

戦いが始まったという報を受けた加賀藩主・前田慶寧(よしやす)は、正月6日、まだ戦況は知らないで、徳川方に味方するため、直ちに出兵をした。ところが、越前のあたりまで進んだ時、ほとんど思いもなかった徳川方敗走の報が入りつた。すでに徳川を朝敵とする勅も出ているので、このまま徳川方につくと、朝敵にもなり孤立しかねない。それを避けるためには、至急、朝廷方であることを表明しなければならぬと判断し、加賀藩は、越前坂井郡長崎まで進軍していた兵を呼び戻し、加賀藩は朝廷方に尽くすと急遽表明したのである。

「錦の御旗」を掲げ官軍が北陸道を北上してくると、加賀藩は、遅れをとったことの挽回のため、賤ヶ嶽の合戦後の藩祖・前田利家公を見習って(?)か、進軍の先鋒を努めることを願い出るが、拒否され(藩祖の場合と違い、信用されなかったらしい)た。なぜなら、加賀藩は、前年慶応3年の王政復古の号令の時も、藩主・前田慶寧がとった行動は、号令の発令とともに京都を引き払い、国許にもどったのであり、官軍方は、後にその処置について詰問している。勿論、加賀藩は許されたのであるが、その代償は、貨幣や弾薬、米などの食料、大八車など大量の軍需物資を献納することとなった。

4月になると、加賀藩にも出兵の命令が下り、小川仙之助、箕輪知太夫らの精鋭部隊が送り出された。七尾軍艦所にいた加賀藩御自慢のいわゆる「梅鉢海軍」も、軍需物資や兵を載せて、北越地方などの北国の戦地に向かった(郷土(七尾出身)の小説家・杉森久英の『能登』の中の「七尾軍艦所」に詳しい)。彼らは、長岡城攻撃など、新潟県、山形県にかけて各地を転戦した。この戦いには、約7,600名が出兵、そのうち103人が戦死している。

後に、加賀藩は、戊辰戦争で戦死した人々の英霊を手厚く祀るため、金沢市郊外の卯辰山に「招魂碑」を建立された。その拝殿と神門は、金沢城内の能舞台と唐門を移築したものであり、この招魂社が、現在、金沢市石引町にある護国神社の始まりである。

## 2. 西南の役

明治6年(1873)1月、名古屋鎮台派の1小隊から生いたった郷土部隊は、明治9年(1876)3月には、歩兵第7連隊(名古屋第3師団下)が組織された。司令部は旧金沢城内に置かれ、3大隊、約3千人の兵力を擁していた(第9師団は、まだ設置されていない)。

明治10年(1877)1月30日夜、鹿児島私学校生徒、鹿児島草牟田の火薬局及び造船所の占領した。

同年2月15日、西郷隆盛は兵を率いて鹿児島を出発し、政府に不平を唱えた私学校生の騒

**前田慶寧**(まへだ よしやす・一八三〇～一八七四) 加賀金沢藩三万石前田家第十四代当主。  
天保元年、前田斉泰(第十三代)の嫡男として江戸に生まれる。天保十三年將軍徳川家慶の偏諱授受を受け、慶寧と名乗る。慶應二年、斉泰が致仕した後、家督を相続するが文久三年には上洛の朝命を受けた斉泰の代理として入京している。この際、文久三年の政変後の長州藩との交渉に失敗し、斉泰の命に反し、病気を称し、退京したことから謹慎させられていたが、慶封に際し赦されており、江戸城留守役に命じられていた。さらに掃蕩してからは、斉泰に教えをうけ、藩政改革に着手し、軍制の強化・土木事業の振興などを行なう一方で、家茂・慶喜の両藩に隣り、上洛して官廷警備、慶喜との意見などに奔走している。慶喜の死後、藩主就任以前に多くの尊王論者が集まり、補佐していたが、元治元年禁門の変後に断罪され、藩内は佐幕一辺倒となり、王政復古後、慶応四年の鳥羽・伏見の戦いにおいては慶喜救援のため出兵するに及んだが、幕府軍敗戦の報に接し、藩内小松まで進んでいた兵を止めることができ、危うく朝敵の名を受けずすますことができた。この後、慶寧は朝廷から北越戦争の参戦を許され、東北諸藩鎮庄の先鋒となっていた。その功により、明治二年、朝廷より賞禄一万五千石を受けるとともに版籍奉還を許され、金沢藩知事に任ぜられている。これとともに職制も大幅に改変し、常備軍を

設置している。明治四年の廢藩置縣をもって金沢藩は廃され、慶寧はじめ前田氏一族は同年東京へと移住している。明治七年、相模熱海において没しており、諡は恭敏公。歌集として『月令和歌』『恭敏公詠草』がある。  
①天保元年五月四日 ②前田斉泰 ③景徳院 ④大千代 ⑤蘭阜、善我、先春堂 ⑥崇(有馬頼徳の女・靈鑑院)、通(鷹司政道の女・顯光院) ⑦二男六女 長子利嗣 ⑧尋(久徳氏)、利佐(鈴木氏)、宇路(酒井氏) ⑨慶應二年四月四日 ⑩従三位、参議 ⑪明治七年五月一八日四五歳 ⑫石川県史、加賀藩史料

## 戊辰戦争と

章2 p.237 ~ 238

## 新政府の発足 201

### 府の発足

羽・伏見の戦い①。慶喜追討。相楽総三の赤報隊の東進②。強6カ国、局外中立を宣言。偽官軍として処刑③。詔書の誓文公布。五榜の掲示。三城無血開城④。本書の制定。羽越列藩同盟結成。野戦(彰義隊壊滅)⑤。江戸を東京と改称。幕府の戦い終る⑥。新政府の制定。天皇、即位の礼。号と改元(一世一元の制)。幕府の戦い終る(若松城落城)⑦。幕府の戦い終る(箱館戦争)終る。幕府戦争終結⑧。

### 2 戊辰戦争

⑦ 五稜郭の戦い(箱館戦争) 1869(明治2)年5月 旧幕府軍をひきいた榎本武揚らが降伏。土方歳三らは戦死。五稜郭は開城となり戊辰戦争が終了。  
⑧ 五稜郭 官軍の進路 東海道軍・東山道軍 北陸道軍 奥羽越前府軍 蝦夷地征討部隊 山陰道鎮撫使 官軍に出兵したおもな藩 奥羽越前藩同盟 同盟脱落 庄内兵最大進出線 会津兵最大進出線 数字 擧 降伏の月日



⑥ 会津の戦い 1868(慶応4)年8~(明治元)9月 会津・庄内藩への追討令に対し、東北諸藩は奥羽越前藩同盟を結んで抵抗。会津藩は白虎隊・娘子軍も参加したが、会津若松城は攻め落とされた。図は白虎隊自刃の場面。



⑤ 長岡城の戦い 1868(慶応4)年5~7月 局外中立の長岡藩家老河井継之助は停戦を拒否されたため戦ったが、7月落城。

④ 上野戦争(彰義隊の戦い) 1868(慶応4)年5月 旧幕臣は彰義隊を結成して、上野寛永寺に拠り反抗したが、大村益次郎指揮の総攻撃により1日で壊滅。



③ 江戸城無血開城の会談 1868(慶応4)年3月13~14日 江戸幕府藩邸でおこなわれた西郷と勝の会談により、15日に予定の江戸城総攻撃は中止。4月、無血開城となった。

② 1~2月 三は年賀 東山道を 軍とされ、 1870年。

# 戊辰戦争と新政府の発足 201

章2 p.237 ~ 238

## 府の発足

- 羽・伏見の戦い①。慶喜追討。相楽彰三の赤報隊の東進②。強6カ国、局外中立を宣言。強官軍として処刑③。面条の誓文公布。五榜の揭示④。戸城無血開城⑤。本書の制定⑥。羽越列藩同盟結成⑦。野戦(彰義隊壊滅)⑧。コを東京と改称⑨。戸城の戦い終わる⑩。天皇、即位の礼⑪。台と改元(一世一元の制)⑫。の戦い終わる(若松城落城)⑬。行幸⑭。の戦い(箱館戦争)終わる⑮。辰戦争終結⑯。

## 2 戊辰戦争



**7 五稜郭の戦い(箱館戦争)**  
1869(明治2)年5月  
旧幕府軍をひきいた榎本武揚らが降伏。土方歳三らは戦死。五稜郭は開城となり戊辰戦争が終了。

**5 五稜郭**  
官軍の進路  
● 東海道軍・東山道軍  
● 北陸道軍  
● 奥羽総督府軍  
● 蝦夷地征討部隊  
● 山陰道鎮撫使  
● 官軍に出兵したおもな藩  
○ 奥羽越列藩同盟  
○ 同盟脱藩  
○ 庄内兵最大進出線  
○ 会津兵最大進出線  
数字 帰順・降伏の月日

**4 錦御旗(錦旗)** 天皇が「朝敵」の征討を命じる際、軍事的指揮権を委任する意味で、下賜された旗。「白之御旗」と「月之御旗」の二つ1組。



**0 会津の戦い**  
1868(慶応4)年8~(明治元)9月  
会津・庄内藩への追討令に対し、東北諸藩は奥羽越列藩同盟を結んで抵抗。会津藩は白虎隊・娘子軍も参加したが、会津若松城は攻め落とされた。図は白虎隊自刃の場面。



**5 長岡城の戦い**  
1868(慶応4)年5~7月  
局外中立の長岡藩家老河井継之助は停戦を拒否されたため戦ったが、7月落城。

**4 上野戦争(彰義隊の戦い)**  
1868(慶応4)年5月  
旧幕臣は彰義隊を結成して、上野寛永寺に拠り反抗したが、大村益次郎指揮の総攻撃により1日で壊滅。



**3 江戸城無血開城の会談**  
1868(慶応4)年3月13~14日  
江戸薩摩藩邸でおこなわれた西郷と勝の会談により、15日に予定の江戸城総攻撃は中止。4月、無血開城となった。

## 4 明治天皇の即位と東京行幸



**東京行幸** 1868年7月、江戸を東京と改称。翌年3月には天皇が東京に移り、東京遷都となった(東京行幸)。図は橋のかかっていない多摩川に舟橋を浮かべてわたった時の様子。

## 5 五榜の揭示

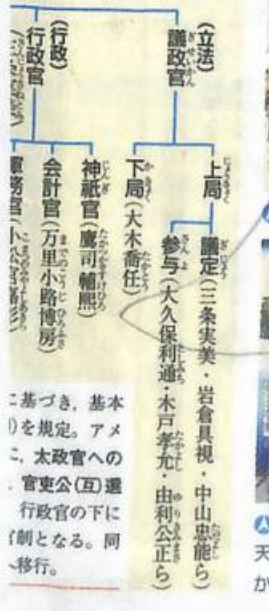
- 五榜の揭示 一八六八年三月
- 第一札 定 一人タルモノ五倫ノ道ヲ正シクスヘキ事  
一 鯨寡孤独疾ノモノヲ憫ムヘキ事  
一 人ヲ殺シ家ヲ焼キ財ヲ盗ム等ノ悪業アル間敷事
  - 第二札 定 何事ニ由ラス宜シカラサル事ニ大勢申合セ候ヲ徒党ト唱へ、徒党シテ強テ願ヒ事企ルヲ強訴トイヒ、或ハ申合セ居町居村ヲ立退キ候ヲ逃散ト申ス、堅ク御法度タリ。
  - 第三札 定 切支丹邪宗門ノ儀ハ聖ク御制禁タリ。
  - 第四札 定 自今以後獵ニ外人ヲ殺害シ或ハ不心得ノ所業等イタシ候モノハ、朝命ニ悖リ御国難ヲ醸成シ候而巳ナラス、……
  - 第五札 定 自然今日ノ形勢ヲ窺ヒ、畏リニ士民トモ本國ヲ脱走イタシ候儀、堅ク差シ留メラレ候。

**五榜の高札** 五箇条の誓文を公布した翌日に掲げた五種の高札で、人民の心得を示した。第3札は旧幕府の方針を継承したため、キリスト教の禁止などが定められた。



1~3月  
三は年貢  
東山道を  
軍とされ、  
。1870年、  
下諏訪に  
た。

## よる新政府組織図 (1868年閏4月、p.202)



ス  
マ  
統  
リ  
の  
勝

第4部 近代・現代